不定期刊行　　第 483 号　2013.03.27

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩
池田工業高等学校

池工山岳部　本年度納めの乗鞍日帰り山行

池工の今年度最後の山行を 3 月 23 日に日帰りで実施した。生徒には「僕は山スキーで行くけど、ボード、スキー、つぼ足のいずれでもいいよ。」と声をかけたところ、本当にその通り顧問も含め、スノーシュー往復組 3 人、往路スノーシューで帰りはスノボ 1 人、往路スノーシューで帰りはスキー1 人、山スキー2 人、テレマーク 1 人と極めてバラエティに富んだパーティ構成となった。直前になって 2 人が行かれなくなったということで、スノーシューとスキーがそれぞれ一人ずつ減ったが、総勢 6 人での実施となった。

今回の目的地は乗鞍岳。雪のある 3000m の山としては御嶽と乗鞍は条件さえよければ高校生でも十分登ることができる山である。そうは言っても積雪期の 3000m の独立峰への登山である。位ヶ原から上はいつでも風が吹いていると言っても過言ではない。だから、天候と時間（13:00 を行動打ち切り時刻）に応じ、いくつかの行動打ち切りポイント（ゲレンデトップ、位ヶ原、大雪渓のトイレ、肩の小屋）を設定して計画を立てた。

学校を 7 時 10 分に出発し、乗鞍高原スキー場には 9 時に到着。さっそくルートを確認して 9:20 にリフトに乗ろうとすると元長山協会長の百瀬さんの率いるパーティが一足先に出発するところだった。「高校生頑張っているね」と激励された。予報では午前中は晴れの予定だったが、予報より寒気の張り出しが強いのか、空は曇っており、ゲレンデも風が吹いている。これでは位ヶ原へ出れば吹かれるなと思いつつ、ゲレンデトップまで進む。すでに先行者が大勢取り付いているのが見える。

10:00 それぞれのいでたちで最初の壁に向かった。昨日降った雪だろうか。表面にはパウダーが乗っているが雪はしまっている。10:20 最初の壁をそれぞれのペースで登り切り、もう少し登った 2200m の地点で一本入れる。時折強い風が吹き、位ヶ原から上はさぞやと感じられる。生徒には、「左に見える丸っこい山が高天ヶ原、右手が乗鞍。樹林帯の先に見える正面の台地状の平が位ヶ原だ。次は樹林帯の切れる位ヶ原の登り口まで頑張ろう。」と行く手を説明する。さらに進むと、右手の木の間越しに穂高連峰と槍が見え始めた。少しずつ天候も回復し始めているようだ。

11:45　2390m 位ヶ原手前の斜面の下で、その先をどうするか考えながら一本取る。先行していた百瀬さんのパーティもその少し先で休んでいたが、僕らが着いてしばらくすると上部へ登って行った。位ヶ原の台上では時折雪煙が上がっているが、このくらいは織り込み済み。こういった雪山は初めての面々は、位ヶ原の登りにやや手こずりながらも 12:05 には台地の上に出た。肩の小屋も見えるが、その下部は凍ってテカテカに光っている。もう一頑張りして、夏のトイレ（大雪渓停留所）まで行こうと生徒の尻を

叩いて進ませる。表面は少し凍って固いが、それだけにつぼ足の生徒たちでも潜らず、何の問題もなく進める。12:45　トイレ脇（2620m）で風を凌ぐ。「ここから上の斜面はアイゼンを持ってきていない生徒には危険であること、タイムリミットと決めていた13:00が近いことの二つをもって、本日の行動はここまでとする。」と生徒に伝え、下山の用意をさせた。

スキー、ボード、つぼ足の３隊が分断しないようにコーチの山内君と僕とで前後をブロックしながら、位ヶ原の下まで降り、そこで大休止。時刻は 13:30、持ってきたラーメンをみんなで作って遅い昼飯とした。山で食べるとただのインスタントラーメンがどうしてこんなに美味いのだろう。風もない穏やかな安全地帯に下って食べるラーメンの味は最高だった。最高の景色をおかずにゆっくりとラーメンを食べたあとは、パウダースノーの斜面をゲレンデまでゆっくりと下り、15:00にゲレンデトップ、駐車場に着いたのは15:50だった。

雪山を楽しみながら、最大限安全に登る。所期の目的を十分達成し、スキーヤーもボーダーもウォーカーもそれぞれに楽しめた。晴れ渡った青空の下に、照らされて凍った斜面が一層光り輝き、頂上には雪煙が舞い上がっていた。

ロープさえあれば・・・

前号で、恥をしのんでポールを落とした顛末を書いたところ、いろいろな方から反応があった。僕はどんな時でもロープとスリング、カラビナを持ち、生徒にもスリングを持たせているが、今回もそれが幸いした。元文登研所長、また長山協会長の柳澤昭夫さんはいつも口癖のように「ロープさえあれば」ということを言われていた。その柳澤さんの話で印象に残っている話がある。

とある秋の日、写真を撮るために奥さんに作ってもらった弁当をもって、運動靴姿で白馬に行った時のことだという。雪渓の手前まで行ったとき、突然大声が聞こえたので、駆けつけてみると、雪渓に開いた1mにも満たない穴に人が落ちていた。5mほど墜落し、運が悪いことに、そこから一枚岩を10mほど沢芯を滑り落ちてしまったようだ。穴は深くヘッドランプの光も届かないが、声をかけると返事はあった。助けにおりたいが運動靴故、アイゼンはもちろん、ピッケルもロープもない。秋の連休中のこと、通りすがる人は多いが、誰一人ロープを持っている人はいない。急を聞きつけて白馬駐在所の警察官が駆け付けてきたときはすでに２時間が経過しており、呼びかけても応答はない。２人で降りる準備をしているところへやってきた大町署員と昭和大医学部の学生も加わって引き上げたときにはすでに絶命していたそうだ。

「俺は一体、何十年山をやってきたのだ、ロープ一本もっていなかったばかりに助かる命をみすみす失わせてしまった」・・・。常日ごろ防御の登山ということを唱える柳澤さんは、そういってロープの重要性を語っていた。23日、柳澤さんの３回目の命日の日に、乗鞍岳に登りながら「安全登山」に改めて思いを致した。